

中高齢者のためのアサーティブネス自己陳述尺度の開発 —信頼性および妥当性の検討—

関口 由香^{*1} 長田 由紀子^{*2} 伊波 和恵^{*3} 菅沼 憲治^{*4} 白崎 けい子^{*5}

Development of an assertiveness self-statement scale for middle aged and older adults: Investigation of the Reliability and the Validity

SEKIGUCHI, Yuka, OSADA, Yukiko, INAMI, Kazue, SUGANUMA, Kenji and SHIRASAKI, Keiko

要旨

本研究は中高齢者のアサーティブネスに関する自己陳述を測定する尺度を開発し、その信頼性と妥当性を検討することを目的とした。高齢者のアサーティブネスに関連する認知的側面を測定する項目を先行研究から抽出し、中高齢者のためのアサーティブネス自己陳述尺度が作成された。調査対象者は60歳以上男女646名（男性319名、女性327名）であった。因子分析の結果、受身的自己表現に関連する認知と考えられる「受身的思考」、攻撃的自己表現に関連する認知であると想定される「攻撃的思考」、アサーティブネスの考え方を理解している「アサーティブ思考」の3因子が抽出された。Cronbachの α 係数による内的整合性が検討され、中程度の信頼性が示された。また、シャイネス自己陳述尺度および怒りの自己陳述尺度、自尊感情尺度との基準関連妥当性が示された。その結果、アサーティブネスの概念と整合性のある高い妥当性が示された。

キーワード

アサーティブネス、自己陳述、尺度、中高齢者

Abstract

The purposes of this study were to develop a self-report measure that assesses assertive self-statements of middle-aged and older adults, and to examine its reliability and validity. Items that measure cognitive aspects concerning the assertiveness of older adults were selected from previous studies, and an assertiveness self-statement scale for middle-aged and older adults was developed. The participants of the survey were 646 people (319 men and 327 women) aged 60 years and above. As a result of factor analysis, the following three factors were extracted: "passive thinking" which is considered to be the cognition related to passive self-expression, "aggressive thinking" which is assumed to be the cognition related to aggressive self-expression, and "assertive thinking" which includes understanding the concept of assertiveness. The internal consistency of the scale was examined with the Cronbach's alpha coefficient, which showed moderate reliability. In addition, the criterion-related validity was examined by correlating the scale with the Shyness self-statement scale, the Anger self-statement scale and the Self-esteem scale. It was seen that the Assertive self-statement scale showed high criterion-related validity.

Key words

Assertiveness, self-statement, scale, middle and older adults

高齢社会において、コミュニケーション不足による世代間トラブルや、高齢者が被害者となる詐欺事件は後をたたない。今後、中高齢者に対しては、互いを尊重しつつ自己表現し、人生の知恵を次世代に伝えてゆくコミュニケーション力がよりいっそう求められるだろう。

他者との円滑なコミュニケーションについて重要な概念としてアサーティブネスがある。Alberti & Emmons(2008)は自己表現を3つに分類した。すべての人の権利を尊重した自己表現で多くの場合目標を達成する「アサーション」、他者を犠

牲にすることによって目的を達成しようとする「攻撃的行動」、自己表現を否定し、自分の感情表出を抑圧する「受身的行動」の3つであった。アサーティブネスは「自己や他者の欲求・感情・基本的人権を必要以上に阻止することなく自己表現すること (Alberti & Emmons, 2008)」と定義されるが、これまで、中高齢者のアサーティブネスに関する研究は少ない。

Corby(1975)は、高齢者の自己開示や不平不満についての対応を示し、高齢者のアサーティブネストレーニングにおける関係開始スキルや目標明確化法の重要性を示唆した。

*1: 聖徳大学心理・福祉学部心理学科・准教授／*2: 聖徳大学心理・福祉学部心理学科・教授／

*3: 東京富士大学経営学部経営学科・教授／*4: 松蔭大学コミュニケーション文化学部生活心理学科・教授／

*5: 聖徳大学・兼任講師

Edinberg, Karoly, Gleser(1977) は、行動分析学的立場から、さまざまな状況におけるロールプレイなどの反応を評定者が評定し、高齢者のアサーティブネスの行動的側面を測定するものであった。高齢者が容易に実施でき、信頼性、妥当性の高い測定法の開発が必要であろう。質問紙に不慣れな中高齢者が回答する際には、項目数の多さが負担となることが考えられるため、負担軽減の観点も重要であると考えられる。

渡部(2006)が行ったアサーティブネスを測定する尺度の展望では、従来のアサーティブネスを測定する尺度は行動的側面の種類を測定するものが中心であることが示された。また、対象者には大学生が多いことも指摘されている。ところが高橋(2006)によると、アサーティブネスを抑制する要因として認知的側面の歪んだ認知や行動的側面のスキル不足などが指摘されている。歪んだ認知の方が重要な抑制因であるという立場と認知と行動の両方が深刻な抑制因であるとする立場とがあるが、従来の研究では認知の方がアサーティブネスの原因であることを示す研究が多いことが指摘された。そこでアサーティブネスの重要な側面である認知的側面を測定できる、中高齢者を対象とする尺度が必要だろう。

認知行動療法の影響を受けながら発展したアサーティブネストレーニングであるが(門松・福岡, 2004)、認知行動療法の理論と実践において認知を捉える場合、認知のレベルは認知プロセス(cognitive process)、認知構造(cognitive structures)、認知結果(cognitive products)に分類され(Ingram, 1990)、なかでも自己陳述、自動思考、あるいは内言といった認知結果が注目されてきた(Glass & Arnkoff, 1997)。なぜなら、認知構造や認知プロセスの相互作用を経て認知結果が生じるという仮説のもと、まず標的とするべき認知レベルが認知結果だからである(増田・金築・関口・根建, 2005)。

アサーティブネスに関する認知的側面を測定する尺度は散見されるにすぎず、Golden(1981)は青年期を中心とした対象者にアサーション認知尺度を開発したが、受身的な観点からのものであった。渡部(2013)は修正版主張性の4要件尺度を作成し、そのうち「他者配慮」「主体性」が認知的側面であった。しかし、アサーティブであると想定した他者配慮は敵意的認知と正の相関を示し、アサーティブネスと攻撃性の分離の難しさを示した。渡部(2013)の「他者配慮」項目は相手の感情や状況の悪化を懸念する傾向を図る内容であり、渡部(2013)は、相手の立場や感情に対する積極的な気遣いを表す内容に修正する必要があることを述べている。

渡部(2013)でも示されたように、従来のアサーティブネスの概念に関する問題点として、率直な自己表現が相応しくない場面での自己表現や、話し手中心の適切性の基準ではアサーションと攻撃性が区別されないという点がある。そこで、三田村・松見(2010)は、アサーションの適用場面を拡大し、聴き

手にとっての適切性という基準からアサーティブネスを定義した。機能的アサーションの概念を導入し、間接表現などの日本的なコミュニケーション様式を積極的に取り入れることで、日本文化により適合的なアサーティブネストレーニングが提供できることを三田村・松見(2010)は示唆している。機能的アサーションはAlberti & Emmons(2008)の定義と矛盾するものではなく、日本の中高齢者にとっては、率直な自己表現だけでは実際の日常場面における問題解決に繋がりがづらいことも想定されるため、機能的アサーションの概念も含めたアサーティブネスの簡便な測定法が求められるだろう。

アサーティブネストレーニングで用いられる認知的技法にRational Emotive Behavior Therapy; REBTの論駁法があるが(菅沼, 2011)、Ellis(1999)は、ラショナルな信念はアサーティブ行動を促進し、イラショナルな信念はアサーティブ行動を阻害することを示している。このような認知的要因を取り入れることで、アサーティブネスと攻撃性とを区別できる可能性があるだろう。

アサーティブネスの関連概念については、自尊感情との正の相関、対人不安やシャイネスとは負の相関が示されている(高橋, 2006)。対人不安に関連する認知的側面の測定に関しては、異性場面における対人不安(Glass & Arnkoff, 1997)やシャイネス(関口・鈴木・根建・池月, 1997)は認知結果である自己陳述の測定法が開発されている。また、アサーティブネスは、概念的には非攻撃的側面であるため(Alberti & Emmons, 2008)、攻撃的側面に関連する概念との検討が必要である。攻撃性の概念は曖昧であり、また幾多の側面を含む複合的な性格概念であるため(増田他, 2005)、近年、攻撃性という観点ではなく、怒りそれ自体を中核的な概念としてとらえ、怒りを認知的・感情的(情動・生理)反応の相互作用およびその結果(行動的反応)として理解する考え方が優勢になりつつある(Eckhardt & Deffenbacher, 1995)。そこで、本研究では中高齢者のアサーティブネスに関して、アサーショティブネス・トレーニングの効果測定にも利用できるような、アサーティブネスの認知的側面である認知結果としての自己陳述を測定する尺度を開発することとした。自己陳述とは、身の回りのできごとやそのできごとの持つ意味について自問自答のように発せられることばのことである。こうした自己陳述は、認知、あるいは思考の一形態であると考えられるが、社会恐怖患者には対人的に消極的な自己陳述が多いなど、臨床心理学的症状と密接な関係があることが知られている(中島・子安・繁樹・箱田・安藤・坂野・立花, 1999)自己陳述に関してはこれまで軽度な対人不安であるシャイネスや怒りについての尺度が作成されており、これらの尺度および自尊感情と本尺度の関連について検討することとした。

方法

項目の準備 高齢者のアサーティブネスに関連する認知的側面を測定する項目を先行研究 (e.g., 相川, 2009; Alberti & Emmons, 2008; Ellis, 1999; Ellis & Tafrate, 1998; 野口訳, 2004) から抽出した。項目選出基準は、高齢者のアサーティブネスに関連した項目であること、アサーティブネスの認知的側面を測定することであった。

内容的妥当性の検討 アサーティブネストレーニングを専門とする臨床心理士2名、老年心理学を専門とする臨床心理士2名で質問項目の内容が適切であるか、また、不足する内容はないかを判断する内容的妥当性の検討を行った。先行研究から、アサーティブネスの認知的側面に関連する要因としてアサーション権 (3項目)、機能的アサーション (6項目)、攻撃的思考 (9項目)、受身的思考 (6項目)、対人場面に関する不合理な思考 (18項目) などが含まれているか、中高齢者の自己陳述として適切であるかどうかを判断した結果、いくつかの項目の表現が変更された。これをアサーティブネス自己陳述尺度原尺度とした。

調査参加者 本研究におけるサンプルは2つの方法で抽出された。1つは首都圏在住の中高年齢者に対する郵送調査であり、2つめのサンプルはマクロミルによるインターネットアンケート調査によるものであった。サンプル1は返送された54名のうち60歳未満の9名、および回答に欠損のあった17名を除いた28名 (男性10名、女性18名、平均年齢70.2歳、SD=5.7、年齢幅60歳~82歳) であった。有効回答率は51.9%であった。サンプル2は60歳以上男女618名 (男性309名、女性309名、平均年齢65.9歳、SD=4.9、年齢幅60歳~85歳) であった。両者はまとめて分析された。サンプル全体の人数は646名 (男性319名、女性327名、平均年齢66.1歳、SD=5.0、年齢幅60歳~85歳) であった。

質問紙 アサーティブネス自己陳述尺度原尺度42項目を用いた。教示文は (関口他, 1997) や (増田他, 2005) の自己陳述を測定する尺度の教示文を参考に「ここには、対人関係に関するあなた自身の考えについて尋ねる項目をいくつかあげてあります。各項目を読んで、「まったくそう思わない (1)」~「まったくそう思う (5)」まで自分の考えをよく表している数字に○印をつけてください。一つの項目について、あまり深く考えすぎずに、自分の考えにほぼ合うと思われる所に印をつけて下さい。」であった。回答方法は「全くそう思わない1、あまりそう思わない2、どちらともいえない3、ややそう思う4、全くそう思う5」の5件法であった。

基準関連妥当性を検討する尺度として、3つの尺度を用いた。非アサーティブネスのうち、受身的な態度と関連するシャイネスについて、シャイネス自己陳述尺度 (関口他, 1997) を用いた。これは対人場面における否定的な認知「低い自尊感情」と「過度の受容欲求と自己期待」を測定する各10項目を5件法で測定する尺度であった。また、非アサーティブネスの攻撃的な

態度と関連する怒りについては、怒りの自己陳述尺度 (増田他, 2005) を用いた。これは怒り喚起を伴う対人場面における自己陳述を測定するもので、「他者からの不当な扱い」「敵意に満ちた考え」「報復の正当化」「自己への叱責」「他者への非難」各5項目計25項目を5件法で測定するものであった。正の関連が想定されている自尊感情については、自尊感情尺度 (山本・松井・山成, 1982) を使用した。単因子構造10項目で測定するものであった。フェイスシートは、年齢、性別、同居者、健康状態、仕事、通院中の病気について回答させた。

手続き 郵送調査におけるサンプルは、首都圏の自治会加入者、あるいは中高年齢者向けの講演会の参加者に対して配布され、郵送にて返送された。インターネットにおける調査は株式会社マクロミルにより日本全国60歳以上の男女モニタに対して実施された。郵送調査においては、質問紙の提示順がランダムであり、インターネットにおける調査では、項目の提示順がランダムであった。

倫理的配慮 本研究への参加は任意であり、協力しない場合でも不利益を被ることはないこと、回答を拒否しても不利益を被ることはないこと、学術目的で発表すること、プライバシーの保護等を文書で説明し、同意が得られた場合に調査を実施した。本研究は聖徳大学ヒューマンスタディに関する倫理審査委員会の審査を受け、承認 (H24U012) を得た後に実施した。

結果

因子構造の検討 アサーティブネス自己陳述原尺度42項目を最尤法プロマックス回転による探索的因子分析を実施した。Kaiser-Meyer-Olkin のサンプリング適切性基準は、KMO=.890であった。固有値が1以上の因子は9つあったが、スクリープロットから3因子を指定し、再度最尤法プロマックス回転による因子分析を行った。因子負荷量が.40未満の項目を削除し、再び因子分析を行った。安定した因子構造が認められたため、各因子の因子負荷量上位5項目を選出し因子分析を行った。因子負荷量と因子間相関の結果をTable 1に示した。第1因子は「私は人づきあいがどうしてもうまくできない人間である」「私には話し相手がいないし、これからもうできないだろう」など受身的自己表現に関連する認知と考えられるため「受身的思考」と命名した。第2因子は「私にひどい扱いをする人は最低の人間だ」「私に対する失礼な態度は決して許されない」などの因子負荷が高いことから、攻撃的自己表現に関連する認知であると想定されることから「攻撃的思考」と命名した。第3因子は「よい人間関係のためには、自分のものの言い方に配慮することは大事だと思う」「自分の意見を通すためには、相手の立場や状況など考慮しなくてもよい (逆転項目)」という項目が含まれることからアサーティブネスの考え方を理解していることが考えられるため「アサーティブ思考」と命名した。以降の分

Table 1
中高齢者用アサーティブネス自己陳述尺度の
因子分析結果（最尤法プロマックス回転）

		因子負荷量		
		I	II	III
I 受身的思考	私は人づきあいはどうしてもうまくできない人間である	.781	-.005	.134
	私には話し相手がいないし、これからできないだろう	.746	.040	-.053
	私はいろいろなとうまくやっていくことができない	.738	.028	.075
	私の話を聞いてくれる人は誰もいないだろう	.628	.014	-.196
	私には何の取り柄もない	.613	-.108	-.054
II 攻撃的思考	私にひどい扱いをする人は最低の人間だ	.066	.724	.233
	私に対する失礼な態度は決して許されない	.006	.698	.211
	年配者である私を敬ったり、大切にしたりしない人は非常識な人間だ	-.105	.690	-.181
	周りの人は年長の私にやさしく親切にしなければならない	-.052	.586	-.120
	周りの人こそ私にもっと配慮すべきだ	.052	.552	-.172
III アサーティブ思考	よい人間関係のためには、自分のものの言い方に配慮することは大事だと思う	.062	.006	.589
	自分の意見を通すためには、相手の立場や状況など考慮しなくてもよい	.082	.139	-.545
	思い通りに事が進むように、相手に配慮しながら伝えてみようと思う	.006	.115	.508
	頼まれたことを断ることは必ずしも悪いことではない	.052	.012	.442
	自分の思いがうまく伝わらないときは、別のやりかたを試せばいい	-.095	.026	.441
因子間相関		I	II	III
		II	.324	
		III	-.497	-.273

n=646

析では逆転項目の得点を逆転し、下位尺度得点は下位尺度の合計得点を算出したものを用いた。受身的思考・攻撃的思考が低いほど、またアサーティブ思考が高いほどアサーティブであるといえる。第1因子、第2因子の項目の得点をすべて逆転させ下位尺度ごとに合計し、平均値を算出した。第1因子「受身的

思考」の平均値は18.84（SD=3.453、得点幅5～25、95%信頼区間18.58～19.11）、第2因子「攻撃的思考」の平均値は16.15（SD=3.221、得点幅5～25、95%信頼区間15.90～16.39）、第3因子「アサーティブ思考」の平均値は19.57（SD=2.424、得点幅13～25、95%信頼区間19.38～19.76）であった。

G-P分析による各項目の弁別力の検討 各尺度得点の平均値を基準とし、上位群、下位群に分類した。ボンフェローニの補正を行い、補正後の有意水準.01%のもとで有意差が認められるかどうか検討した。その結果、第1因子の上位群（19点以上368名）と下位群（19点未満217名）においてすべての項目で上位群の得点が下位群の得点より有意に高かった（効果量 $d=1.42\sim 1.75$ いずれも効果量大）。第2因子の上位群（16点以上285名）と下位群（16点未満361名）においてもすべての項目で下位群の得点に比べ上位群の得点が有意に高かった（効果量 $d=1.24\sim 1.59$ いずれも効果量大）。第3因子の上位群（20点以上351名）と下位群（20点未満295名）においてすべての項目で上位群の得点が下位群の得点より有意に高かった（効果量 $d=1.12\sim 1.35$ いずれも効果量大）。すべての項目について上位群の得点は下位群よりも有意に高く、効果量も大きいことが示され、アサーションに関する認知的側面としての自己陳述を測定する尺度として弁別力を備えていることが確認された。

信頼性の検討 下位尺度におけるCronbachの α 係数を算出し、内的整合性の検討を行った。その結果、第1因子「受身的思考」 $\alpha=.83$ 、第2因子「攻撃的思考」 $\alpha=.78$ 、第3因子「アサーティブ思考」 $\alpha=.64$ であった。

基準関連妥当性の検討 シャイネス自己陳述尺度（関口他, 1997）、怒りの自己陳述尺度（増田他, 2005）、自尊感情尺度（山

Table2
アサーティブネス自己陳述尺度と各尺度の相関係数

	アサーティブネス自己陳述尺度			シャイネス自己陳述尺度		怒りの自己陳述尺度				
	受身的思考	攻撃的思考	アサーティブ思考	低い自尊感情	過度の受容欲求と自己期待	他者からの不当な扱い	敵意に満ちた考え	報復の正当化	自己への叱責	他者への非難
攻撃的思考	.249**									
アサーティブ思考	-.378**	-.178**								
低い自尊感情	.747**	.230**	-.268**							
過度の受容欲求と自己期待	.344**	.431**	-.166**	.563**						
他者からの不当な扱い	.533**	.336**	-.326**	.540**	.390**					
敵意に満ちた考え	.315**	.418**	-.115**	.361**	.419**	.676**				
報復の正当化	.275**	.541**	-.115**	.295**	.445**	.518**	.685**			
自己の叱責	.511**	.191**	-.115**	.602**	.416**	.578**	.510**	.416**		
他者への非難	.288**	.406**	-.047	.348**	.414**	.650**	.844**	.683**	.532**	
自尊感情尺度	-.626**	-.083	.258**	-.682**	-.325**	-.401**	-.204**	-.139**	-.588**	-.195**

n=646

** $p<.01$, * $p<.05$

本他, 1982) との関連を検討し、Table 2 に示した。第 1 因子「受身的思考」はシャイネスの自己陳述「低い自尊感情」($r=.75, p<.01$) と強い正の相関、自尊感情尺度 ($r=-.63, p<.01$) との比較的強い負の相関が認められた。第 2 因子「攻撃的思考」については怒りの自己陳述尺度の「報復の正当化」($r=.54, p<.01$)、シャイネス自己陳述尺度の「過度の受容欲求と自己期待」($r=.43, p<.01$) に比較的強い正の相関がみられた。第 3 因子「アサーティブ思考」はアサーティブネス自己陳述尺度の受身的思考 ($r=-.38, p<.01$)、攻撃的思考 ($r=-.18, p<.01$) と弱い負の相関が認められ、また、シャイネス、怒りの自己陳述 ($r=-.12 \sim -.33, p<.01$) とともに弱い負の相関が示された。怒りの自己陳述尺度の「他者への非難」とは相関が認められなかった。「アサーティブ思考」と自尊感情 ($r=.26, p<.01$) とは弱い正の相関が認められた。

考察

本研究では、中高齢者のアサーティブネスに関連する認知的側面の認知結果に相当する自己陳述を測定する尺度を開発し、信頼性と妥当性の検討をおこなった。その結果、受身的思考、攻撃的思考、アサーティブ思考の 3 因子が抽出され、中程度の信頼性と高い妥当性を有することが明らかになった。本研究において抽出されたアサーティブ思考は、受身的および攻撃的思考とは弱い負の相関関係にあった。本研究で抽出されたアサーティブな自己陳述の項目は、アサーションの権利や機能的アサーションに関するもの、つまり、他者を配慮しながら、自己の目的を達成しようとする自己陳述や、良い人間関係のために自己表現を工夫するなど REBT のラショナルな信念 (Ellis, 1999) に関連した自己陳述であると考えられる。本研究でとりあげた自己陳述は、アサーティブネス・トレーニングでも治療標的として取り上げられる認知結果であり、Ellis (1999) が示したアサーティブ行動を促進するようなラショナルな認知から生じるものであるといえる。また、機能的アサーションにおける間接表現などの日本的なコミュニケーション様式は、中高齢者にとってもなじみのあるものであるといえるだろう。これに対して、攻撃的、受身的自己陳述は、自己あるいは他者を尊重しない、アサーティブ行動を阻害するイラショナルな認知 (Ellis, 1999) を反映した自己陳述であると考えられるだろう。本研究で開発した尺度を用いることで Alberti & Emmons (2008) の自己表現の分類の通り、受身的、攻撃的、アサーティブな態度に関する自己陳述を測定することが可能になった。このことにより、個人にどのような自己表現の特徴があるかを把握することができ、またアサーティブネストレーニングにおいて自己表現の分類に応じた援助やアサーティブネストレーニングの効果測定が可能になるだろう。

これまでのアサーティブネスの研究において、アサーティ

ブネスと攻撃性には分離が困難であることが示唆されてきた (e.g., 玉瀬・越智・才能・石川, 2001)。これについて用松・坂中 (2004) は、性格特性の攻撃性と行動レベルでの攻撃的行動の複雑な関係を示唆しており、行動レベルの攻撃性をアサーティブネスと区別し、他者尊重の視点を重視することを強調した。ところが、渡部 (2013) では、アサーティブネスの認知的側面の「他者配慮」は敵意的認知と正の相関を示した。渡部 (2013) の他者配慮は相手の感情やその場の状況を踏まえて自己表現を行うことが適切なのか自問する傾向であり、他者に対する敵意的認知も、他者に関心や注意を向けるという要素を含んでいるため、攻撃性との弁別ができなかったと考察している。本研究のアサーティブな自己陳述は、怒りの自己陳述と概ね弱い負の相関が示された。また、非アサーティブネスである攻撃的思考は怒りの自己陳述と弱い正の相関および中程度の正の相関が示された。アサーティブネスは、概念的には非攻撃的側面であり (Alberti & Emmons, 2008)、本研究で作成されたアサーティブネス自己陳述尺度はアサーティブネスの概念的にも妥当であることが示されたといえるだろう。アサーティブネスは、怒りのマネジメントやアサーティブネストレーニングで改善することが示されており (e.g., Walker & Cheseldine, 1997)、怒りとアサーティブネスの自己陳述は負の関連があると想定される。怒りの感情を激しく表出するのではなく、相手へ配慮しながら自己表現することでアサーティブネスが改善する可能性が示唆されたといえるだろう。

また本研究の結果から、アサーティブな自己陳述はシャイネスと弱い負の相関を示した。また、非アサーティブネスである受身的思考はシャイネスと中程度から高い正の相関を示した。Ollendick (1983) は、アサーティブネスに関連する要因として対人不安をあげており、負の関連があることを明らかにした。このように多くの先行研究においてアサーティブネスは、対人不安やシャイネスとは負の相関が示されている (e.g., 用松・坂中, 2004; 玉瀬他, 2001)。本研究で使用した自己陳述尺度の「シャイネス」は軽度な対人不安であることから、先行研究を支持したといえるだろう。また、「受身的思考」は怒りの自己陳述と弱い正の相関を示した。Gilbert & Miles (2000) は対人不安の認知的側面と怒りに正の相関があることを示した。認知的側面の受身的思考と怒りは、概念的に対立するものではないといえるだろう。

また、アサーティブ思考は、自尊感情を指標とした精神的健康と弱い正の相関が示された。高橋 (2006) においても、アサーティブネスは自尊感情と正の相関を示すことが明らかにされていることから、本研究は妥当な結果を示したといえるだろう。また、非アサーティブである攻撃的思考は自尊感情とほとんど関連が見られなかったが、受身的思考とは比較的強い負の相関がみとめられた。自尊感情を高めることを目的にする場合、ア

サーティブ思考を高めることはいうまでもないが、アサーティブネスの受身的思考を低減させることで自尊感情を高める可能性が示唆されたといえるだろう。

本研究の限界として、アサーティブネスの認知的側面が、介入の効果によって変動しうる認知結果を捉えているかが明らかにされていない点が挙げられる。この点については、中高齢者に対するアサーティブネストレーニングを実施し、アサーティブネスに関する自己陳述が変容するかどうかを検討することが必要だろう。また、本研究のサンプルは健常者であったが、自己表現で問題を抱える臨床群において3つの自己表現の様相を検討することも必要だろう。

本研究の結果から、中高齢者のアサーティブネスの認知的側面である自己陳述を測定する本尺度が信頼性、妥当性を有していることが明らかにされた。Alberti & Emmons(2008)の自己表現の分類の通り、アサーティブな自己陳述と非アサーティブな側面である受身的あるいは攻撃的の自己陳述を区別して測定できることが示された。本尺度は15項目と簡便に測定できるため、中高齢者でも負担が少なく、また、介入における効果を継続的に測定するためにも有用であろう。今後の展望として、効果測定が可能であるかどうかを実証的に検証することが求められる。またアサーティブネスに関しては若年層を対象とした研究が多いが、高齢化社会といわれる本邦においては、今後中高齢者を対象とし、アサーティブネスの自己陳述を取り上げた研究がさらに展開していくことが求められる。

謝辞：本研究は科研費123330213の助成を受けたものです。

引用文献

- 相川 充 (2009). 人づきあいの技術—ソーシャルスキルの心理学 (セレクション社会心理学) サイエンス社
- Alberti, R. & Emmons, M.(2008). *"Your Perfect Right 9th"*, Impact Publishers
- Corby, Nan (1975). Assertion training with aged populations. *The Counseling Psychologist*, 5 (4), 69-74.
- Eckhardt, C. L. & Deffenbacher, J. L.(1995). Diagnosis of anger disorders. In H. Kassirer (Ed.), *Anger disorders: Definition, diagnosis, and treatment*. Washington, DC: Taylor and Francis
- Edinberg, Karoly, Gleser (1977). Assessing assertion in the elderly: An application of the behavioral-analytic model of competence. *Journal of Clinical Psychology*, 33, 3, 869-874.
- Ellis A.(1999). Rational Emotive Behavior Therapy and Cognitive Behavior Therapy for Elderly People, *Journal of Rational-Emotive and Cognitive-Behavior Therapy*, 17, 5-18.
- Ellis, A. & Tafrate, R. C.(1998). How to control your anger before it controls you. (野口京子訳 (2004). 怒りをコントロールできる人, できない人 金子書房)
- Gilbert, P., & Miles, J. N.(2000). Sensitivity to Social Put-Down: it's relationship to perceptions of social rank, shame, social anxiety, depression, anger and self-other blame. *Personality and individual differences*, 29 (4), 757-774.
- Glass, C. R. & Arnkoff, D. B.(1997). Questionnaire methods of cognitive self-statement assessment. *Journal of consulting and clinical psychology*, 65, 911-927.
- Glass, C. R., Merluzzi, T. V., Biever, J. L., & Larsen, K. H.(1982). Cognitive assessment of social anxiety: Development and validation of a Self-Statement Questionnaire. *Cognitive Therapy and Research*, 6, 37-55.

- Golden, M.(1981). A measure of cognition within the context of assertio. *Journal of Clinical Psychology*, 37, 253-262.
- Ingram, R.E.(1990). Self-focused attention in clinical disorders: Review and conceptual model. *Psychological Bulletin*, 107, 156-176.
- 増田智美・金築 優・関口由香・根建金男 (2005). 怒りの自己陳述尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 行動療法研究, 31, 31-44.
- 三田村仰・松見淳子 (2010). 相互作用としての機能的アサーション パーソナリティ研究, 18, 220-232.
- 用松敏子・坂中正義 (2004). 日本におけるアサーション研究に関する展望 福岡教育大学紀要第4分冊 (教職科編), 53, 219-226.
- 中島義明・子安増生・繁樹算男・箱田裕司・安藤清志・坂野雄二・立花政夫 編 (1999). 心理学辞典 有斐閣
- Ollendick, T. H.(1983). Development and validation of the Children's Assertiveness Inventory. *Child and Family Behavior Therapy*, 5, 1-15.
- 関口由香・鈴木 平・根建金男・生月 誠 (1997). シャイネス自己陳述尺度の標準化に関する研究 日本行動療法学会第23回大会発表論文集 菅沼憲治 (2011). アサーショントレーニングの効果に関する実証的研究 風間書房
- 高橋 均 (2006). アサーションの規定因に関する研究の動向と問題 広島大学大学院教育学研究科紀要第一部, 55, 35-43.
- 玉瀬耕治・越智敏洋・才能千景・石川昌代 (2001). 青年用アサーション尺度の作成と信頼性および妥当性の検討 奈良教育大学紀要, 50, 22-231.
- Walker, T., & Cheseldine, S.(1997). Towards outcome measurements: monitoring effectiveness of anger management and assertiveness training in a group setting. *British Journal of Learning Disabilities*, 25, 134-137.
- 渡部麻美 (2006). 主張性尺度研究における測定概念の問題：4要件の視点から 教育心理学研究, 54, 420-433.
- 渡部麻美 (2013). 主張性の4要件尺度の改編と妥当性の検討: 攻撃性との関連に焦点を当てて 社会言語科学, 16 (1), 96-108.
- 山本真理子・松井 豊・山成由起子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-69.